

かた 固まり

本財団被爆体験証言者 笠岡貞江

被爆当時の生活

八時十五分

私は当時、爆心地から三、八キロ地点の広島市江波町に、両親と九十三歳の祖母と四人で暮らしていました。姉三人は嫁いでおり、小学校五年生の弟は広島県双三郡吉舎町のお寺に字童疎開しており、兄は神戸の商船学校に在学中でした。

私は、二・五ドレグのガラス窓のある東向きの部屋に向かっていました。突然、目の前のガラス窓一面が、真っ赤、いや日の出の太陽にオレンジ色を混ぜたような綺麗な色になりました。その瞬間にドーンと大きな音がしたと同時にガラスが割れ、粉々になつた破片が私に向かって飛んできました。爆風の凄い圧力で後ろに押され、私は一瞬何も分からなくなりました。我に返つて頭に手をやると、ヌルリとしました。ガラスで傷をしたためでしたが、痛いとは感

海軍に出征する兄とともに自宅の前で撮った家族の写真。前列左端が筆者。(8歳)(昭和15年3月)

卷之三

した。酒の好きな人で、歳の中にビールが大事にしまってあります。酒でもいいから、飲みたい」と言つたのに飲ませなかつたのが今でも、心残りになつています。父には、団扇で扇いで上げる

を見つけましたが、既に八日に死亡し、遺体は処理されていました。遺品は小袋に少しお骨と髪の毛だけでした。父とはぐれで、子供と年寄りのことを気遣い、家に帰りたかったであろうと心情を察すると今も胸が痛みます。

苦難のその後

翌年、私は体のあちこちに吹き出物がで、右胸に三つも大きな穴が開き、半年以上治らず困りました。貧血も続きました。両親を無くし、その後の生活は悲惨でした。就職試験には落ち、お見合いをしても結婚に至らず、被爆が障害になったことは否めません。縁あって被爆者と結婚しましたが、夫は三十五歳の時、癌で死亡しました。私は原爆を悪の固まりと言っています。

戦争を知らない 世代に伝えたい

原爆のことを思い出すと涙が出てきて、語ると胸に込み上げるものがあります。し

近くの大手町で建物疎開の作業に出ていました。八月六日は作業を休み、家にいました。よく晴れた日でした。朝早く、両親は広島市役所近くの知人の家の建物疎開の手伝いに出かけ、家にいませんでした。警戒解除のサインを聞いて、もう大丈夫。敵機が来る心配はないと思い、私は朝食の後片付けや食器洗いをした後、洗濯物を庭の物干しに干し終えて、家の中に入りました。

近所の人もいましたが、何が起きたのか分かりません。不安のまま外に出た時、建物の瓦が落ち、壁土が落ちて散乱しているのに気付きました。九時を過ぎた頃に街中に出ていた近所のおじさんが戻りましたが火傷で皮膚が変色し、顔と腕がピンク色になつており、「広島は大変じや、ピカーと光つてみんなやられた」と大声で言われました。

親戚の家の前に逃げているとの知らせを受け
兄が迎えに行き、大八車に乗せて連れ帰りました。戸板に寝ていて姿は生きている人とは思えませんでした。頬は大きく腫れ上がり、着衣は焼かれて、何も着ておらず身体が真っ黒で、光っていました。声を聞いて父だと分かりました。薬はなく、胡瓜

体全体が白くなつた人たちが両手を胸の辺りまで上げ、襟襷をぶら下げて、無言で行列して、陸軍病院の方へトボトボと歩いていました。まるで幽霊のようでした。櫻は火傷で皮がぶら下がつたもので、体が白いのは灰を被つて、白く見えたことが後で分かりました。

夫は三十五歳の時、癌で死亡しました。私は原爆を悪の固まりと言っています。

両親を失う

市を中心部に作業に出ていた大人や中学
おとな

替えることもできません。さわつたらズル

取りました。死ぬ人が多いので、火葬場は

ビデオを平成十二年二月に撮つていただき

市の中心部に作業に出ていた大人や中学
生が臨時救護所になつた小学校に収容さ
れていることを聞いて、ますます心配は募
りました。親類のおじさんを探しに行つて
もらいましたが、火炎のため引き返して来
られました。

神戸にいた兄が帰省の途中、広島駅近く
で原爆に遭い、夕方、家に着き、すぐに両
替えることもできません。さわつたらズル
っと黒いところが剥げて下から赤みが出来
した。表面だけでなく、内部まで火傷して
いました。意識はあり、「雑魚場町にいて
キチと一緒に逃れようとしたが、離れてし
まつた。探してくれ」と妻を案じていまし
た。水を欲しがりましたが、火傷の人に水
を飲ますと死ぬと聞いていたため、水道が

取りました。死ぬ人が多いので、火葬場は使えず、海岸の砂浜に穴を掘つて、板や木切れを集めて火葬しました。近くで多くの火葬の煙が立ち、異臭が漂つっていました。

兄は母を探しに行きましたが、なかなか見つけることができませんでした。兵隊さんが被爆者を舟に乗せ、坂村、似島、宮島などの救護所に運んでいることが分かりま

ビデオを平成十二年二月に撮っていたきました。これを機会に小学生らに被爆体験を話すようになり、本年、財団法人広島平和文化センターの証言者にならせていだきました。世界中から核兵器が無くなり、平和が実現されるよう訴えて行きたいと思っています。